



# 皇學館

## 学園報 第47号

発行・編集 学校法人皇學館 企画部  
TEL:0596-22-6496・8600

●大学 大学院・専攻科・文学部・教育学部・現代日本社会学部  
〒516-8555 三重県伊勢市神田久志本町1704  
TEL:0596-22-0201(代表) FAX:0596-27-1704

●高等学校・中学校 三重県伊勢市桶部町138  
[高校]〒516-8577 TEL:0596-22-0205(代表)  
[中学]〒516-8588 TEL:0596-23-1398(代表)

# 民間企業と初の連携協定

## 三重銀行、百五銀行と協定を締結

地域社会との連携によって教育の充実を図り、本学の教育研究の成果を広く産業界・地域・自治体に還元するため、これまで伊勢市や名張市、明和町など公的機関と積極的に連携協定を締結してきた本学。十一月には地元企業である三重銀行、百五銀行とそれぞれ協定を結ぶなど、地域連携の動きをますます活発化させている。

## 教育・産業資源を相互活用

本学では九月一日に「皇學館大学地域連携推進室」を設置。教育研究の成果を積極的に地域社会に還元し、地域貢献及び連携を図ってきた。その一環として産学連携に

も取り組み、十一月十九日には四日市市の株式会社三重銀行(種橋潤治取締役頭取)・株式会社三重銀行(種橋潤治取締役頭取)・株式会社三重銀行(種橋潤治取締役頭取)と、同月二十一日には津市の株式会社百五

銀行(上田豪代表取締役頭取)・百五経済研究所(雲井純代表取締役社長)との間でそれぞれの教育・産業資源を活用して相互の機能向上を図り、地域の活性化と人材育成に寄与することを目的に連携協定を締結した。

これまで自治体や公共施設との連携実績はあるが、民間企業との連携協定は今回が初めて。調印式では、今後は大学における地域課題解決のための学修(講師派遣・科目提供・実習施設紹介など)やインターンシップを通じて人材育成、大学の教育課程編成に関する地域ニーズやグローバル化への提言、地域の活性化・地域産業の振興に関する

協力、さらに地域連携のモデル構築などで互いに確認された。連携・協力を行うことが産学連携のスタートインングプロジェクトとして三重銀行・三重銀行・百五銀行・百五経済研究所とは昨年より、百五銀行の協力のもと学内企業説明会を実施しており、今年度は十二月四日に開催され、三年生約三百名が参加した。調印式で種橋三重銀行頭取は「次世代の人材育

成のため、私たちが培った経験、知識を活用していただきたい」と述べ、上田百五銀行頭取は「地域の発展には人材育成が必要。長く協力関係を維持し、伊勢を中心とした地域の発展に貢献したい」と展望を語った。清水潔学長は「第一線の知識をご提供いただけることで、教育に新たな展開を生み出すと期待している。内実を伴った連携に発展するよう努力を重ねたい」と話した。

いまま、地域を教育で活用しながら大学が地(知)の拠点としての役割を果たすことが求められている。▼従来、大学は教員を派遣したり、受託研究を行ってきた。それには学生が少人数で参加することはあっても、大学全体に関わるプログラムはほとんどなかった▼そのなかで、わずかではあるが、本学は伊勢学や参拝見学を中心に地域を学び、将来、その学びを自らの地域貢献として発展させていく取組みを続けてきた▼さらに、地域の課題解決に向けた取組みを大学教育のなかで充実させていきたい。実学を学ぶ現代日本社会学部や教育学部はもちろん、虚学とされる文学部での学びも地域の課題解決と結び付けていくことが地(知)の拠点としての役割である▼このほど三重銀行・三重銀行・百五銀行・百五経済研究所と連携協定の下に地域課題の解決に向けた人材育成をめざすプログラムがスタートすることとなった。とくに前者は産学連携講座「グローバル化と地域の経済社会」を通じて、自らの学びを地域のために役立たせる視野を養うことが期待される。学びを活かした新たな価値の創出に向けての一歩である。



皇學館大学・三重銀行及び三重銀総研 人材育成に関する連携協定調印式



皇學館大学・百五銀行・百五経済研究所 連携協定 調印式

## 子ども育成財団と 学生主体の連携を締結

十一月二日、本学は公益財団法人・三重子どもわかもの育成財団と、児童・青少年の育成と次代を担う人材育成に向けた連携協定を締結した。本協定に基づき、県立みえこどもの城においてこれまでインターンシップやボランティア活動などで本学の学生を受け入れていた同財団が、学生の視点で職員とともに子育て応援イベントなどを企画・実施する。学生主体の連携は今回が初めて。本学の学生にとっては、

十一月二日、本学は公益財団法人・三重子どもわかもの育成財団と、児童・青少年の育成と次代を担う人材育成に向けた連携協定を締結した。本協定に基づき、県立みえこどもの城においてこれまでインターンシップやボランティア活動などで本学の学生を受け入れていた同財団が、学生の視点で職員とともに子育て応援イベントなどを企画・実施する。学生主体の連携は今回が初めて。本学の学生にとっては、

十一月二日、本学は公益財団法人・三重子どもわかもの育成財団と、児童・青少年の育成と次代を担う人材育成に向けた連携協定を締結した。本協定に基づき、県立みえこどもの城においてこれまでインターンシップやボランティア活動などで本学の学生を受け入れていた同財団が、学生の視点で職員とともに子育て応援イベントなどを企画・実施する。学生主体の連携は今回が初めて。本学の学生にとっては、

十一月二日、本学は公益財団法人・三重子どもわかもの育成財団と、児童・青少年の育成と次代を担う人材育成に向けた連携協定を締結した。本協定に基づき、県立みえこどもの城においてこれまでインターンシップやボランティア活動などで本学の学生を受け入れていた同財団が、学生の視点で職員とともに子育て応援イベントなどを企画・実施する。学生主体の連携は今回が初めて。本学の学生にとっては、

十一月二日、本学は公益財団法人・三重子どもわかもの育成財団と、児童・青少年の育成と次代を担う人材育成に向けた連携協定を締結した。本協定に基づき、県立みえこどもの城においてこれまでインターンシップやボランティア活動などで本学の学生を受け入れていた同財団が、学生の視点で職員とともに子育て応援イベントなどを企画・実施する。学生主体の連携は今回が初めて。本学の学生にとっては、

## ユースプロジェクト第一弾 オレンジみこしで、いじめ・虐待防止をPR



知事の似顔絵ジャンパーを手にみんなで記念撮影

十一月十六日、三重県の子ども虐待防止啓発キャンペーンに合わせ、県立みえこどもの城周辺で「オレンジみこし」の練り歩きイベントを実施した。これは、本学の学生が中心となって県や同施設の職員らと企画会議を重ね、企業等の協力のもと実現したものである。子ども虐待防止シンボルカラーのオレンジ色の神輿で虐待防止をPRするというアイデアは学生の発案。学生と職員が手分けをして同施設を訪れる親子や近隣の小学校・幼稚園を回り、オレンジ色の短冊に夢や願い事、いじめ・虐待防止のメッセージを書いてもらい、その後、寄せられた約千枚の短冊を学生が貼って三基の神輿を作成した。イベント当日は約四百五十名の子どものほか、鈴木英敏三重県知事も参加。学生代表を務めた国文学科三年の中島雅弘君は「成功できたのは、仲間や協力していただいた方たちのおかげ。感謝したい」と語った。

これは、本学の学生が中心となって県や同施設の職員らと企画会議を重ね、企業等の協力のもと実現したものである。子ども虐待防止シンボルカラーのオレンジ色の神輿で虐待防止をPRするというアイデアは学生の発案。学生と職員が手分けをして同施設を訪れる親子や近隣の小学校・幼稚園を回り、オレンジ色の短冊に夢や願い事、いじめ・虐待防止のメッセージを書いてもらい、その後、寄せられた約千枚の短冊を学生が貼って三基の神輿を作成した。イベント当日は約四百五十名の子どものほか、鈴木英敏三重県知事も参加。学生代表を務めた国文学科三年の中島雅弘君は「成功できたのは、仲間や協力していただいた方たちのおかげ。感謝したい」と語った。

# 第六十二回式年遷宮奉仕報告 式年遷宮奉仕の感動を胸に

学生部長 田浦雅徳

このたびは深津睦夫文学部長をはじめ七名は、神宮より御高配を賜り皇學館大学を代表して神宮式年遷宮の臨時出仕として奉仕する栄誉を頂いた。生まれて初めて平礼烏帽子・白雑色、赤単、白括り袴に身を包まれて、十月一日に先ず川原大祓に奉仕した。五十鈴川御

手洗場近くの祓所で、清められた後、飯御代、飯御船代、御装束神宝辛櫃を正宮まで運ぶ。私は白山芳太郎先生らと十番目の辛櫃を担ぐ役についた。肩に食い込むほどのしりと重い辛櫃であった。小雨の中、黙々と連なる奉仕員の長い列は雨にもやり幽幻な趣を醸し出していた。雨儀廊をくぐり無事正殿の床下に辛櫃を置いて退出した。十月二日はよいよい遷御当日である。私たちが臨時出仕者として正宮、新宮内の庭燎、即ちがり火の番をする役であった。私の担



川原大祓の後、正宮まで運ばれる御装束神宝(内宮) 写真提供/神宮司庁

当は新宮中重庭燎東である。金属製の塙のなかで薪や松の小枝をくべながら燎(かがり火)を躊躇の姿勢で燃やし続ける役を四人一組で担当した。遷御における明かりはこの庭燎と松明しかない。午後五時半から火を熾したが、私はただ庭燎を見つめながら、ひたすら注意深く火を絶やさぬことだけに意を用いた。午後六時、遷御の儀は始まった。隣の正宮で行われている儀式の具合は知るよしもないが、神楽歌と浅沓の音から進行の順調なことをうかがわせた。夜空を見上げると新宮を圍繞する木々の合間から星明かりが洩れ、瞑目すると絶え間ない虫の音や鳥のさえずりが聞こえてきた。それはあたたかも遷御の儀を言祝ぐかのようであった。午後八時には「カケコ

「」という鶏鳴(けいめい)の声を聞き取ることができた。いよいよ「出御」である。全身に電流のような緊張が走った。そのころ頭上でそこらじゅうの木々の梢がざわめくように風音を立て、同時に風が正殿に向かって吹き始めた。それまで私たちの方向に向かっていた庭燎の炎が正殿の方へ向きを変えた。新宮を包む大気全体が正殿に向けて一斉に移動するような感じで、実に神々しい出来事であった。入御のときの御列にはただただ圧倒された。御神体に入った白い絹垣が通るまえには濡れ簀を飛ばして浄壇とした。御神体通過のあとは庭をあげ、仄かな残り火に必死で息を吹きかけた。火が焼けて炎が立ち上ったときにははっとした。十時前には一切の儀式が終

奉仕させて頂いたのは実に有り難き幸せであった。かかる貴重な体験の機会を与えて頂いたことに深甚の感謝を捧げるとともに、この神恩に報いるべく今後の教育研究活動に邁進せねばならぬと決意を新たにされた次第である。

皇學館奉仕会は、毎年夏休み頃から神嘗祭までの毎週木曜日に「神宮奉仕会」の方のご指導の下、木遣り唄の練習を行っている。主な活動は御田植祭・収穫祭への参加、奉曳車の組み立て、初穂曳での木遣り唄の披露だ。今年も第六十二回式年遷宮に先立って行われたお白石持ち行事のボランティアに参加するため、例年より早くから練習を行ってきた。お白石持ち行事では全国からお越しになられた特別神領民の

参加させて頂き、二十一年一度のこの機会に巡りあったからこそできる貴重な経験をさせて頂いた。一番思い出に残っているのが今夏に行われたお白石持ち行事だ。全国から特別神領民として来られた方々と共に「新宮」にお白石を運び、奉獻する作業(行事)は炎天下の中大変だった。というのも、行事の開始が朝早いこともあり皆さんの気持ちを奮い立たせるのが難しいのである。大半は自分の祖父や祖母に当たる年齢の方々だ。「その人たちがどうしたら盛り上がりたか」ということを考えてみると、うしろから「よし、よし」という声援が聞こえてくる。それは、自分たちが活躍していることに誇りを感じている。声をかけて頂き、私自身も嬉しく、行事を通して一期一会の縁の大切さを伊勢の神々に教えて頂いたと感じている。

しかし、毎回のようには奉獻が終わると「今日は楽しかった、ありがと」「僕は皇學館の卒業生だけれど君たちが活躍しているのを見て嬉しいよ」と声をかけて頂き、私自身も嬉しく、行事を通して一期一会の縁の大切さを伊勢の神々に教えて頂いたと感じている。

## 確かなる神の存在を感じた

文学研究科博士後期課程二年 神守昇一



私は十月四日、五日の外宮の川原大祓と遷御の御儀に臨時出仕として御奉仕させて頂いた。遷御前日の川原大祓では、御装束神宝辛櫃を川原祓所から正宮まで歩くという職務を終始緊張しつつも無事に果たす事が出来た。遷御当日は時折雨が降る天気の中で庭燎を焚いていたが、鶏鳴三声と出御の奏請が耳に入るところには雨が止み、浄

## 木遣り唄に気持ち込め

神道学科四年 富田楊裕



私は今回行われた第六十二回神宮式年遷宮お白石持ち行事と神嘗祭に本

方をお迎えし、おもてなしの気持ち込めて木遣り唄を披露した。初穂曳では日頃の練習の成果を存分に発揮し、今年の収穫に感謝して新穀を外宮に奉納した。二十年に一度の式年遷宮という節目に学生で行ってきた。お白石持ち行事では全国からお越しになられた特別神領民の

参加させて頂き、二十一年一度のこの機会に巡りあったからこそできる貴重な経験をさせて頂いた。一番思い出に残っているのが今夏に行われたお白石持ち行事だ。全国から特別神領民として来られた方々と共に「新宮」にお白石を運び、奉獻する作業(行事)は炎天下の中大変だった。というのも、行事の開始が朝早いこともあり皆さんの気持ちを奮い立たせるのが難しいのである。大半は自分の祖父や祖母に当たる年齢の方々だ。「その人たちがどうしたら盛り上がりたか」ということを考えてみると、うしろから「よし、よし」という声援が聞こえてくる。それは、自分たちが活躍していることに誇りを感じている。声をかけて頂き、私自身も嬉しく、行事を通して一期一会の縁の大切さを伊勢の神々に教えて頂いたと感じている。

しかし、毎回のようには奉獻が終わると「今日は楽しかった、ありがと」「僕は皇學館の卒業生だけれど君たちが活躍しているのを見て嬉しいよ」と声をかけて頂き、私自身も嬉しく、行事を通して一期一会の縁の大切さを伊勢の神々に教えて頂いたと感じている。

縁の大切さを神に教わった  
私は今回行われた第六十二回神宮式年遷宮お白石持ち行事と神嘗祭に本

方をお迎えし、おもてなしの気持ち込めて木遣り唄を披露した。初穂曳では日頃の練習の成果を存分に発揮し、今年の収穫に感謝して新穀を外宮に奉納した。二十年に一度の式年遷宮という節目に学生で行ってきた。お白石持ち行事では全国からお越しになられた特別神領民の

参加させて頂き、二十一年一度のこの機会に巡りあったからこそできる貴重な経験をさせて頂いた。一番思い出に残っているのが今夏に行われたお白石持ち行事だ。全国から特別神領民として来られた方々と共に「新宮」にお白石を運び、奉獻する作業(行事)は炎天下の中大変だった。というのも、行事の開始が朝早いこともあり皆さんの気持ちを奮い立たせるのが難しいのである。大半は自分の祖父や祖母に当たる年齢の方々だ。「その人たちがどうしたら盛り上がりたか」ということを考えてみると、うしろから「よし、よし」という声援が聞こえてくる。それは、自分たちが活躍していることに誇りを感じている。声をかけて頂き、私自身も嬉しく、行事を通して一期一会の縁の大切さを伊勢の神々に教えて頂いたと感じている。

しかし、毎回のようには奉獻が終わると「今日は楽しかった、ありがと」「僕は皇學館の卒業生だけれど君たちが活躍しているのを見て嬉しいよ」と声をかけて頂き、私自身も嬉しく、行事を通して一期一会の縁の大切さを伊勢の神々に教えて頂いたと感じている。

お木曳車にその年収穫した新穀を載せ、外宮に奉納する「初穂曳」行事

十一月十七日、「ご遷宮とまちづくり」をテーマに本学と三重大による初の合同シンポジウムが開催され、活発な意見交換がなされた。基調講演で本学研究開発推進センターの千枝大志助教は参詣曼荼羅図を用いながら時代による伊勢のまちの変化を解説。三重大の浅野聡准教授は、遷宮を節目に公共事業や

## 皇大・三重大が合同シンポ開催「ご遷宮とまちづくり」語る

民間投資が行われてきたことを例に挙げ、「地域の歴史や文化、景観を活かしたまちづくりが大切」と指摘した。参加者の一人は「遷宮で町並みが変わっていくのをわかりやすく説明してもらった。伊勢を賑わせていくために、今後は何をしたらいいか考えたい」と話していた。



まちづくりのあり方を熱心に議論

## 皇學館 | 人物列伝 | 22

### 大津 有一 (おおつ ゆういち)

明治35年石川県生。昭和5年東京帝国大学文学部卒業。旧制第七高等学校教授、金沢大学教授、同法文学部部長を歴任。兼任、客員を含め昭和43年から昭和54年まで皇學館大学教授を務めた。1902～1983。



## 伊勢物語研究の権威

日本古典文学において注釈を施した総合的な叢書「朝日新聞社」、日本古典文学大系(岩波書店)、日本古語大系(岩波書店)、新編日本古典文学全集(小学館)の順に刊行されてきた。なかでも、日本古典文学大系は戦後の学的水準に基づく研究を総合した企画であった。本項でもすでに紹介した倉野憲司(古事記)、山田孝雄(今昔物語集)、後藤丹治(太平記)、野間光辰(西鶴集)といった先学たちも関わってきたものである。古くは貴人の子が嫁ぐときに源氏物語を持参することは多くあったが、同じような発想からか、この古典大系を嫁入り道具の一つにしたという話も少なくはない。大津有一は、この古典大系で築島裕とともに伊勢物語の校注を担当した。校注というのは本文校訂と注釈をあわせた造語である。大津はそれまでに伊勢物語に

伊勢では麻吉を定宿とし、当時、皇學館大学は旧一宮館のみで、研究室は相部屋だったが、そこでは野間光辰、重松信弘らと議論していたという。なんともぜいたくな時代であった。(国文学科教授 齋藤 平)

# 東儀秀樹氏が特別講義

十月二十九日、教育学部専門科目「日本伝統文化教育論」(深草正博教授)の授業において、雅楽師で本学特別招聘教授の東儀秀樹氏による特別講義が開催され、学生・教職員約六十名が受講した。



「天の音」を表現しているという笙。教室にはその透明感のある美しい音色が響いた

講義は「これからの自分の未知数に期待している」という東儀秀樹氏の人生観に始まり、日本の雅楽の完成度の高さや伝承方法、雅楽器「笙」「篳篥」「龍笛」の演奏法と、その音が表すものなど、大変興味深い話が語られた。さらに、日本の文化を理解し説明できてこそ真の国際人といえることや、勇気を持って一歩前

に歩み出た者だけが感動や知識を得られることなど、若者に対する示唆に富んだメッセージがあり、講義の最後には氏が筆篋により「ハナミズキ」「翼をください」の二曲を演奏。受講者は雅楽の奥深さを噛み締めながら聴き入っていた。この日、初めて雅楽の演奏を聴いたという教育学科三年の森下慎一朗君



雅楽や伝統文化についてわかりやすく解説する東儀氏

## 皇學館のアイデンティティを確認

### 参拝見学・山室山参拝を実施

十一月五日に参拝見学・山室山参拝を実施し、全学部及び専攻科の学生と教職員が参加した。

十一月五日に参拝見学・山室山参拝を実施し、全学部及び専攻科の学生と教職員が参加した。

従来は、参拝見学を春学期に、山室山参拝は秋学期に実施していたが、授業日数を確保するため

秋学期での統合実施となった。参拝見学は本学の建学の精神や設立の歴史の核

ともいうべき伊勢の神宮のゆかりの地を巡り、皇學館大学のアイデンティティを確認するために実施されるものである。また、山室山参拝は、国学者本居宣長の奥墓を参拝し、近世の国学者たちが

## 平成25年度文部科学省「私立大学等改革総合支援事業」

### 支援対象校タイプ1(大学教育質転換型)、タイプ2(地域特色型)に選定されました

この事業は、平成25年度より文部科学省と日本私立学校振興・共済事業団が共同で実施するもので、「[大学力]の向上のため、大学教育の質的転換や、特色を發揮して地域の発展を重層的に支える大学づくり、産業界や国内外の大学等と連携した教育研究など、私立大学等が組織的・体系的に取り組む大学改革の基盤充実に資するため、経常費・設備費・施設費を一体として重点的に支援する」ことを目的として、タイプ毎に選定が行われました。

- タイプ1 「建学の精神を生かした大学教育の質向上」(大学教育質転換型) 申請校数727校、選定校数255校、選定率35%。
- タイプ2 「特色を發揮し、地域の発展を重層的に支える大学づくり」(地域特色型) 申請校数540校、選定校数157校、選定率29%。

学生の主体的な学修と交流の場として文部科学省より補助を受けて設置された「百船」が今年四月の開設より半年を経過。九月までの利用者が延べ三五四三人に上ることがわかった。一日平均は四十四人、一日での最多利用人数は一三三人、また、サポートカウンターでのノートパソコン・iPad・電子黒板・プロジェクトアの貸し出しは延べ六四八件となっている。「百船」の運営には学生スタッフがあたり、グループワークゾーンでのゼミの事前学習や電子黒板を使っている模擬授業、プレ

### 「百船」利用者、半年で約3500人

ゼンターションルームを使った海外語学研修の事前学習など、各ゾーンで学生の主体的な学修の取組みが活発に行われている。「話もでき、パーティションの壁が全面ホワイトボードで文字も書けるので、模擬授業の準備の打合せでよく利用する」と話すのは教育学科三年の近藤宏和君。同じく郡山翔君は「WiFiでインターネットが使えるので調べ物に便利」とIT環境に満足している様子だ。今後は学生の利用状況をアンケート等で分析して、さらに利用しやすい環境を整備していく。



本居宣長の墓前で代表学生が献詠



教員の説明を熱心に聞く学生

今回の滝原宮・丹生神社での参拝見学は、神聖な雰囲気を感じ取る貴重な機会でした。とくに滝原宮で見たほづつかず



の自然はとても神秘的

### 皇學館の原点を知る

現代日本社会学科二年 濱井沙月

- ◆一年：神麻績機殿神社、山室山、齋宮歴史博物館、本居宣長記念館
- ◆二年：滝原宮、丹生神社、神宮寺
- ◆三年：伊雑宮、海の博物館、金剛證寺
- ◆四年：三重県護国神社、結城神社、松浦武四郎記念館
- ◆専攻科：滝原宮、山室山、本居宣長記念館

### 本居宣長翁の心に触れる

国史学科一年 辻博仁



私は十一月五日、神宮皇學館時代からの伝統行事である山室山参拝に参加させていただきました。険しい山道を登るのはとても大変でしたが、山頂の奥墓前で厳粛に執り行われた祭典では本居宣長翁の心を直に感じ、身の引き締まる思いがしました。私たちが偉大な先人たちの志を受け継ぎ、素晴らしい日本の伝統と文化を守り、日々学問に精進しなければならぬと、気持ちを新たに秋晴れの日でした。

## 私の学生時代 初志貫徹し、青春を謳歌

神職養成部長 山元義清 国文学科9期(昭和49年卒)



皇學館大学を自分の進学先と決定したのは、昭和四十五年三月上旬であったように記憶している。京都産業大か國學院大か皇學館大かと迷うなかで、「滋賀県人が神主を目指すなら皇學館や」という父の声を押し留めてくれた。中学二年生の夏に高校進学の際の三者懇談会が実施され、私は収入役(公務員)と宮司(神職)の職にある父及び小学校教師の母の後継者として進むことが希望だと伝えた。そのために、守山高から大学を目指すこととなった。大学卒業時には神職資格と国語科の教職免許状をもって郷里に帰ることが使命であったが、加えて図書館司書の資格取得も欲張って挑戦した(高校国語教師として役立った)。単位取得のためには時間的な余裕はなかった(四年生でも授業がぎっしり詰まっていた)はずであるが、大学生活は書道部と古都愛好会、その上、学友会にも足を踏み入れて時を過ごし、著名な師とも交わり、岡田登氏(現・文学部教授)や渡部年晴氏(現・精華寮寮長)らの友と仲良く且つ楽しく青春を謳歌した。近世文学の美山靖教授が伊勢を紹介するために、芭蕉が伊勢外宮の近くの祖霊社で詠んだ「笈の小文」から「何の木の花とは(も)知らず句哉 是せを」を引用された。早速この木の樹種に興味を持って調べた。上代文学では西宮一民教授が「わがほりし野鳥は見せつ底深き阿胡根の浦の球ぞ拾(ひり)はぬ」(「萬葉集」巻第一・十二)を引用。この歌は地名不詳のため、「野鳥」や「阿胡根の底」は何処かと調べ学習に奔走して回った。曾野紫山先生の書道では倉田山校舎に黒布を広げ、「九成宮醜泉銘」を手に楷書で同一文字に半年も筆を走らせ、調査した短歌や俳句を半折にぶつけて練習を繰り返したものだ。皇學館を選んだことにより、後年趣味を聞かれて書道や短歌、俳句と答えることができることへの誇りと喜びを感じている。そして、教師九年、社会教育行政二十四年、神主四十年(神社庁五年含む)に及ぶ私の人生は、担任と両親に約束した初志貫徹の結果である。

# 創立50周年記念 皇高祭

9月19・20日

## テーマ 心を一つに、いくぞ皇高祭!!

### 楽しく終えることができた

50周年の皇高祭はとても楽しかったです。祭典では会場が一丸となり、本当に美しく二拝・二拍手・一拝を揃えることができました。祭典の次はすごく盛り上がった吹奏楽部のステージ。「勝手にシンドバッド」から始まり、さまざまなジャンルの曲を演奏してくれた吹奏楽部のおかげで会場全体が大いに盛り上がり、笑顔があふれました。午後からは斎藤孝先生による講演会。いつものような講演ではなく、自分たちも体を動かして実践しました。また、本校OGでもあるサクソ奏者・大西由希子さんによるコンサートでは普段聞かない音楽を聞くことができ、貴重な体験となりました。2日目は各クラスの催し物でした。みんなが楽しそうな顔をしていたのが印象的で、仲の良い友だちと回るのとはとても楽しかったです。昼からは校友会が企画したウルトラクイズがあり、先生たちの対決には見ているこちらまで熱くなりました。皇高祭が無事に楽しく終わることができて、本当によかったと思います。



総務副委員長  
平田拓海

#### ●祭典

厳肅な雰囲気が始まった「祭典」。参列者一同が頭を垂れ、お招きした神様に本年度の文化祭の意義を申し上げるとともに、学業成就への感謝の気持ちと、その成果をご奉告。そして、これから行われる文化祭の無事と、教職員・生徒一同が今後ますます元気で明るく勉学に励めるようにお祈りを捧げた。



#### ●吹奏楽部 定期演奏会

東海吹奏楽コンクールで金賞、三重県吹奏楽コンクールで初優勝を果たした吹奏楽部は、受賞した2曲に加えてJ-POPの親しみやすい曲やダンスなどのパフォーマンスを披露。会場全体が大いに盛り上がった。この日のために練習に励んできた部員にとって、同級生に晴れ舞台を見てもらえることは格別に嬉しいことのようなのだ。



#### ●クラス展示

2年1組の作品は「心を一つに」とのテーマのもと、クラスの団結と助け合いの精神を軸に、始業式の日から皇高祭の前日まで、早朝や昼休み・放課後を利用して製作。いちばんの苦勞は、ベニヤ板に和紙を貼る作業。二人一組となり、互いに心を一つにしなが、上下左右のバランスをとって一枚ずつ慎重に貼っていく……。そんな達成感にあふれる作品。



# 創立35周年記念 皇中祭

11月23・24日

## テーマ 栄光に向かって走り出せ！ ～煌めく35個目の星へ～

### 達成感であふれた皇中祭

私は今回初めて、実行委員長として皇中祭に関わりました。今回の皇中祭は創立35周年記念でもあり、そんな時にこのような大役を任せられ、喜びと不安が交錯しました。昨年まで、皇中祭での発表は本部役員の生徒数名で行うものでした。しかし今年はHONBUプロジェクトとして実行委員全員で歌を歌い、踊り、ステージを盛り上げました。練習を始めた頃は気持ちがまとまらずに困ることもありました。しかし本番が近づくにつれ、気持ちが一つになるのを感じました。本番は、緊張よりも楽しんでやろうという気持ちの方が強かったです。本番を終えた後の達成感であふれた実行委員の表情は、今でも忘れられません。この記念すべき皇中祭で実行委員長を務め、私はさまざまなことを学びました。35周年という節目の年を機に、さらに皇學館中学校が笑顔あふれる学校となることを願います。



実行委員長 3年  
細川実玖

#### ●花販売・募金

2階のセミナーホールでは、シクラメンやポインセチアなどの鉢植えを販売。色とりどりの鉢植えを求めた来場者で賑わった。売上金は全額が東日本大震災義援金に充てられる。また隣には赤い羽根共同募金の窓口が設けられ、実行委員が大きな声で募金を呼びかけた。



#### ●クラス展示

科学をテーマとする謎解き、世界遺産めぐり、深海の美術館など、6クラスがそれぞれ工夫して作りあげたクラス展示。他にも縁日、和紙によるご選御の行列、桃太郎の英語劇などのプログラムで来場者をもてなした。



#### ●合唱

優勝した3年B組の合唱。「ぶつかり合うこともあったが、本番が近づくにつれみんなの心が一つになった」と生徒たち。当日は、指揮者・伴奏者、そして全員が力を合わせて「大地讃頌」（だいちさんしょう）と「ヒカリへ」を歌い上げた。



### 研究室 探訪

vol. 18

#### 松下道信ゼミ

文学部国文学科

### 漢文学を学ぶことで、世界に開かれた国文学の姿を学んでほしい。

今回のゼミ探訪は、漢文学の松下ゼミ。漢文学とは、もちろん中国の古典文学のこと。中国古典という外国の文学を学ぶことが、日本文学の理解にもつながるのだそうです。



松下道信 (漢文学) 准教授

国文学科でなぜ漢文学を学ぶのですか？ とよく尋ねられます。理由は、日本文学は中国文学から多大な影響を受けて進化してきたものだから。ひとことで漢文学といっても、そこには日本文学をしのぐ長い歴史と膨大な作品があります。ゼミではその中でも、宋から元の時代に活躍した道教の道士の伝記を使っています。道教というと、日本では神道や密教などの中で断片的に伝わっているだけですが、中国では儒教と仏教に比肩するほどスタンダードな宗教で、道士の伝記は日本とは異なる中国の姿を理解するためにはうってつけといえるでしょう。私のゼミの学生には、こうした漢文学の学習を通して、国文学科の学生だからといって日本だけを見ていれば良いのではなく、広く世界に目を向けることの大切さを学んでほしいと思っています。

また明治以降に日本の文学が西洋から大きな影響を受けたように、国文学が世界と深い関係を持ちつつ展開してきたことを理解してほしいと思っています。



#### 学生コメント

#### 三国志の研究をしたい

阪本琴美さん 国文学科4年



ゲームの「三国志」が好きで、そこから本物の『三国志演義』を読むようになりました。卒業論文も『三国志』で書きたいと思いい、松下ゼミを選びました。そんな私ですから、研究旅行で台湾を訪れたとき、高雄の蓮池潭という公園で『三国志』の登場人物が壁に彫られているのを見て、さらに興味が深まりました。いつか司書として図書館の仕事に関わり、『三国志』を多くの人に読んでもらうお手伝いできたらと思っています。

#### 忘れられない研究旅行

中村 華さん 国文学科4年



日本文学が好きで国文学科に入りましたが、2年生のときに『封神演義』という中国の小説を読み、漢文学に興味を持つようになって松下ゼミへ。松下ゼミは少人数でしたが、とても仲の良いゼミでした。先生とのいちばんの思い出は、やはり台湾の研究旅行。先生は中国語が堪能で中国に関する知識も実に多く、バスの移動中はずっとマイクで解説をしてくれました。でも、おかげで現地ガイドさんの出番がありませんでした。

# 学園祭を開催!



## 明日につながる 学びと喜び

教室の授業だけが勉強ではない。自分たちで企画し、計画を立て、意見を調整しながら準備して、当日は思い切り楽しむ。その中で大切なことを学ぶ学園祭も、学校の勉強の一コマ。とくに式年遷宮が行われた本年は、先輩が築いた歴史と伝統を次の世代に伝えることも大切なテーマだったようだ。

## 第52回 倉陵祭 11月1日～3日 テーマ 環(めぐる)

### 永遠に続いてほしい

折りしも式年遷宮が行われた本年、私たちは第52回倉陵祭のテーマを「環(めぐる)」としました。この言葉には、倉陵祭の中で学生がさまざまな出会いを体験し、心をかよわせ、地域文化を築くイベントとして永遠に続いてほしいという思いをこめました。

私自身、倉陵祭の準備を通して、委員会の仲間を支えられました。もちろん、このイベントが成功できたのは実行委員会だけの力ではありません。交通規制をしていただいた警察の方々、多くの先生や大学職員の方々、参加してくれた学生、そしてご来場いただいたすべてのお客様に、尊敬と感謝の気持ちでいっぱいです。

来年も再来年も、こんなに素敵なイベントが続くことを心より願っています。



倉陵祭実行委員長  
来光美希

### 子ども広場

倉陵会館では、劇「アラジンとまほうのランプ」が上演され、手作りクッキー教室やスライム教室などが開かれた。ここでの主役は子どもたち。生地をこねて型抜きして、自分で作ったクッキーを家族とおいしそうに食べたり、スライムの不思議な感触に大はしゃぎしたり、倉陵会館は子どもたちの笑顔と歓声が満ちあふれた。



### 展示

クラブ・同好会など、約20の団体が各棟の教室で日頃の活動を披露。「競技かるた」、「神職装束の着付け体験」、「ディベート」など、見るだけでなく参加・体験して楽しむ展示が多く見受けられた。



### 国文学会

本学国文学会の研究発表会。今年は国文学科卒業生の松田麻希さんの「熊野市域の言語研究―「ライ」について―」と、大学院国文学専攻の史淑明さんによる「樋口一葉の『十三夜』試論」の2題の発表が行われた。ふたりとも少し緊張していたものの、堂々と研究の成果を発表し、参加者からは惜しみない拍手が送られた。



### 屋外ステージ

フラダンスから雑刀、よさこい、マジック、演歌、ジャズ、合気道まで、バラエティ豊かな屋外ステージ。次から次へと繰り広げられるパフォーマンスの数々に、広場は始終笑顔で満ちていた。とくに2日目に行われた祭式研究部による神職装束の紹介は、まさに本学ならではのイベントだった。



### 祭典

倉陵祭の成功と会期中の無事を祈念して、最初に記念講堂で祭典が行われた。大学祭の名にふさわしく、祝詞を奏する祭主は教員、祭典を行う祭員、雅楽を奏する伶人、舞人は学生と、すべて本学関係者で斎行。式典の後、清水潔学長から「今、お越しいただいた皆様にご覧いただく気持ちで、3日間を有意義な時間としてください」という開会の言葉をいただき、倉陵祭がいよいよスタート。



### 樽神輿(たるみこし)

学生有志が思い思いのアイデアを凝らして手作りした樽神輿で伊勢市内を練り歩く、倉陵祭の恒例イベント。今年はご遷宮の年ということもあり、内宮ご正殿を模した神輿や、人気ドラマの主人公の人形をデコレーションした神輿など、7基の神輿が登場。全員お祓いを受けた後、本学から外宮まで巡行した。



### 模擬店

芝生広場や記念講堂前広場、さらに記念講堂に続く坂道には、恒例の模擬店が立ち並んだ。おでん、あげたこ、焼きそば、パンケーキ……。キャンパスは一日中、おいしそうな香りが漂っていた。



### 教育エキスポ

本学教育学会の発表会。広い体育館全体を使って、教育学部のゼミが120以上の研究成果を発表。パネリストと参加者がテーマについて熱く語り合うブースや、自作の漫才ミュージカルや手品、手遊びの実演ブース、さらに老人・妊婦体験、箱庭体験を行うブースなどがずらりと並び、今年も教育エキスポは大盛況を見せた。



### 杉山愛さん講演会

元テニスプレイヤー・杉山愛さんの講演会。世界のトッププレイヤーになるまでに経験したさまざまな出来事を通して、彼女の座右の銘でもある「遊戯三昧(ゆげさんまい: どんなに辛いことも、好きになるまで徹底して続ければ、必ず道は開ける)」という言葉の大切さについて語っていただいた。



皇高 NEWS

笑顔と学び——充実の修学旅行

北海道へ修学旅行

十月八日から三泊四日の日程で、二年生三三〇人が北海道での修学旅行を満喫した。現地では摩周湖や小樽など観光名所を巡ったり、北方領土館を訪れ日本の歴史を学ぶなど、充実した時間を過ごした生徒たち。仲間と友情を深めたり協調性の大切さを学んだり、精神的にも爽やかな旅となったようだ。

北方領土問題に向き合う

二年七組 鳥田陽和 北海道へ四日間、修学旅行に行きました。行きの飛行機は朝早かったにも関わらず、雲の上からの景色に興奮しっぱなしでした。北海道に着くと、三重県では味わうことのできない寒さに身を包まれ、同じ日本とは思えなかったです。最初の見学地、北方領土館では、地図でしか見たことがなかった国後島をうつつらとではありましたが望見することができ、とても感動しました。あんな



世界自然遺産・知床でのワンショット



島後国に見えに間近

に近くにあるながら自由にできる苦しみなど、元島民の方からお話を聞く機会があり、遠い昔の問題ではなく、現在も、これからも日本国民が向き合っていかなければならない問題だと強く実感しました。三日目は、美幌から特急オホーツクで小樽に向かいました。七時間という長旅ではありましたが車中はとても快適で、車窓から美しい自然の風景を楽しみ、また友人と語り合うなどとても楽しく、あっという間に小樽に着きました。小樽の自由行動は修学旅行の中で最も楽しく、とくにガラス工房は器だけでなく、アクセサリーなどの小物もたくさんあって、見ているだけでもワクワクしました。友人と一緒に買い物をして、海鮮丼を食べて二時間ちよつと短い時間でしたが、有意義に過ごすことができました。

この四日間は私にとって高校三年間の中でもとくに胸に残る大きな思い出となることでしょう。

楽しい思い出がいっぱい

二年三組 山路悠平 初めての北海道ということもあり、前日からワクワクしてあまり眠ることができませんでした。空港までのバスや飛行機内では寝てしまおうと思っていました。テンションが上がってしまい起きたままだだったので、よっぽど楽しみにしていたんだと思います。

今回の修学旅行は四日間という短い期間でしたが、学んだことがたくさんありました。それはクラスメイトの大切さや集団行動の重要性、そして何より北方領土問題です。電車の中で、元島民の方に北方領土講話をしていただき、国と国との大きな問題で

歌う楽しさ、伝わる合唱

伊勢市連合音楽演劇発表会

十一月八日に伊勢市観光文化会館にて伊勢市連合音楽演劇発表会が行われた。今年も一年生と二・三年生の合唱同好会が出演し、「ふるさと」と「歌声は風に乗って」の二

あることを再確認し、この貴重なお話を忘れずにいたいと感じました。

ホテルでの過ごし方について注意を受けたこともありましたが、とても寒かった知床五湖、雄大だった摩周湖、そして皆での入浴や食事といった楽しい思い出のほうに圧倒的に多かったです。この貴重な体験を通して学んだことを、今後の生活にも活かしていきたいと思っています。

十一月八日に伊勢市観光文化会館にて伊勢市連合音楽演劇発表会が行われた。今年も一年生と二・三年生の合唱同好会が出演し、「ふるさと」と「歌声は風に乗って」の二曲を発表した。限られた練習時間にもかかわらず、一年生らしい元気の良さで「歌うことが楽しい」という気持ちが伝わってくる合唱であった。小川千鶴先生の指揮に合わせ「ふるさと」はアカペラで、「歌声は風に乗って」は山本あまな

んによる素敵な演奏との発表であった。今まで見たこと、聞いたことがない他校の素晴らしい発表に生徒たちは大変感動していた。発表の最後には全学校で「COSMOS」、「夢の世界」を歌い、最後の「さようなら」では手話を交えながらの大合唱で大変盛り上がり、幕を下ろした。



心を込めて歌い上げた

寄付者芳名

皇學館高等学校創立五十周年・皇學館中学校創立三十五周年記念事業

周年記念行事につきましては四十六号で詳細の通りお慶様をもちまして盛会に終えることができました。ご協力を賜りました皆様には感謝申し上げます。なお、本募金の依頼は終了いたしますが、以後、お申込みいただきました寄付金につきましては芳名録にて、ご芳名掲載とさせていただきますので、何卒ご了承くださいませ。様お願い申し上げます。

宗教界

●埼玉県 久伊豆神社様 五万円

企業

●三重県 (株)二光堂様 五万円 (株)一光堂様 三万円 (有)パルムコーポレーション様 一万円 (株)世古真珠様 一万円

同窓会会員

●愛知県 藤井 基弘様 五万円

三重県

三百十万円(総額七百十万円) 皇學館高等学校 同窓会様 五万円 浅原 由香様 一万円 中村憲太郎様 一万円 山本 和美様 一万円 稲葉 和久様 一万円 大久保佳美様 一万円 木村 潤造様 一万円 林 宣元様 一万円 村田 茂壽様 一万円 村田 静佳様 一万円 村田奈保子様 一万円

愛媛県

岡本 荒侍様 一万円

皇學館高等学校創立五十周年・皇學館中学校創立三十五周年記念事業 寄付金進捗状況

Table with columns: 区分, 申込件数, 申込金額(円), 納入金額(円). Rows include 宗教界, 企業, 一般, 同窓会会員, 後援会賛助会員, 本法人関係, 合計.

注意事項

個人情報保護に関する法律の施行に伴い、ご芳名・金額等の掲載をご希望されない方々につきましては、別記とさせていただきます。

■一般/1名 ■同窓会会員/2名

新プログラムで盛り上がる

創立五十周年記念 第五十一回体育大会

雨で午後の部が延期となっていた体育大会が暑さも和らいだ十月三日、行われた。今回は創立五十周年を祝う記念大会ということもあり、昨年とは大きく変わった点が三つあった。



クラスTシャツを着て、いつもと違う体育大会

一つはクラスごとに違う色のTシャツを着たこと。二つ目は皇學館高校の名物といえる入場行進だ。式年選宮にちなんだお木曳を表現したり、タオルを使って文字を作るなど各クラスがアレンジを加え、多彩な個性が感じられた。三つ目は学年対抗の応援合戦。この種目で三年生は一年生に八団結力Vを見せつけてくれた。同時に、二年生は一年生を、三年生は一年生を、そして、校友会は学校全体を引っ張っていかねばならないんだと改めて考えることができた体育祭だった。

総務副委員長 大畑綾音

運動場に応援の声響く

創立三十五周年記念 第三十四回体育大会

九月二十二日に実施された体育大会。青空の下、生徒たちはどの競技も力を合わせて全力で取り組み、応援の声が運動場中に響き渡る素晴らしい一日となった。三十五周年記念大会を兼ねた今回は記念イベントとしてマスメディアも呼ばれ、音楽に合わせて人文字が完成すると保護者から歓声が上がった。結果は三年B組が優勝、三年A組が準優勝となった。以下に生徒の感想を紹介する。

みんなの力一つに優勝

三年B組 久保梓紗

どの場面も印象深いですが、とくに行進の時の室長の

三年生の団結力に脱帽

二年A組 中村真依

一番楽しかったのは「チャレンジャー・ザ・ギネス」です。みんなで一つになって大縄を跳んだ楽しさは忘れられません。回数もたくさん跳べたうえ、三年生の記録まで後少だったので、来年は一位になれるように頑張りた



クラス全員が一つになれた「クラス一脚」

先輩方の竹取合戦にも感動しました。ほとんど敵チームの陣地に取られていた竹にクラス全員が一斉に集まって取り返した場面には

びっくりさせられました。その団結力と素早い行動は本当に素晴らしいです。来年は私たちが三年生です。みんなのお手本になれるように頑張りたいと思います。

感動で涙を流す

一年A組 平井優子

中学生になって初めての体育大会は、とても心に残る運動会でした。一年A組の結果は最下位。でも、みんなが一つになって協力し助け合い、励まし合い、最高の笑顔、涙がありました。

私は体育大会などで初めて涙を流しました。感動してあふれた涙です。リレーで私は運動があまり得意ではない子からバトンをもらうことが多かったのですが、その子が一生懸命頑張っている姿を見て、そして、その子からバトンを受け取った瞬間涙が出ました。最下位でもみんなにバトンが回り、ゴールできたことが何より嬉しかったです。この体育大会に悔いはありません。とても楽しくて、最高の笑顔で、元気にできて良かったです。来年も頑張ります。

# 三重の高校生が書評バトル

三重県教育委員会と本学との共催による「高校生ビブリオバトル倉田山決戦2013」が十一月十六日、本学を舞台に開催され、南勢志摩地域の高校生をはじめとする十名が白熱の書評合戦を繰り広げた。

## 十名が書評プレゼン競う

一人五分の持ち時間でおすすめの本を紹介し、参加者全員の投票で「一番読みたくなった本」を決めるハジブロバトル。ゲーム感覚で楽しめる全学的に広がりを見せているこの書評合戦が、十一月十六日、「高



聴衆を前に、緊張した表情のバトル

校生ビブリオバトル倉田山決戦2013」と銘打ち、本学を会場に開催された。

この大会は三重県教育委員会が取り組む「みえの学力向上県民運動」の一環として、南勢志摩地域の高校生を対象に、同委員会と本学との共催で実現した。バトルには皇學館高校をはじめ、宇治山田高校、宇治山田商業高校、伊勢高校、伊勢工業高校、南伊勢高校、同委員会から二名の計十名が顔を揃え、五人



本談義に花を咲かせるバトル

ずつ二つのブロックに分かれて本に込めた熱い想いを語った。審査員でもある聴衆の心をつかみ、みごとチャンプ本に選ばれたのは、六十三票中三十二票を集めた「ロコ！ 思うままに」と、十五票を獲得した「子午線の少年達」の二冊。プレゼンターの中西悠二君（伊勢工業高校）と中川心路君（皇學館高校）には、本学から学長賞の賞状が贈られた。



本自体の魅力もさることながら、それをいかに伝えるかがバトルの腕の見せどころ

県内で初めての高校生ビブリオバトルということもあり、発表者は一様に緊張した面持ちだったが、イベント終了後にはそれぞれの紹介本の感想を言い合うなど、参加者同士で会話が弾んだ様子。ビブリオバトルのコンセプト「人を通して本を知る／本を通して人を知る」の通り、楽しく交流を深めていた。

なお、開催にあたっては、本学の岡野裕行国文学科助教（ビブリオバトル普及委員会理事）のほかに、ビブリオバトルサークル「ビブリア」の学生たちが司会進行を務めた。

## 地域活性のきっかけにも

ビブリオバトルは誰でも参加できる気軽さから地域でも広がりを見せており、十一月十七日には本学の地域連携事業の一環として「商店街ビブリオバトル@伊勢銀座新道商店街」が催された。

聴衆として参加したのは商店街の関係者のほか、偶然通りかかった一般の方までさまざま。またご多忙中、鈴木健一



偶然通りがかった人も興味津々の様子で発表を見守る

伊勢市長にもお越しいただき、開会の挨拶をしていただいた。

「中学生」「高校生」「大学生」「一般」の三部門に分かれて行われた大会には計八名のバトルが参加。チャンプ本にはそれぞれ「暗黒女子」「忍びの国」「銃とチョコレート」が選ばれ、紹介した三名には新道商店街の世古一夫理事長から賞状が、本学と同商店街の間で確認された。

## 空手道部・秋田大輝君が

# 全国大会出場

本学空手道部に所属する秋田大輝君（教育学科一年）が十二月七日、八日に東京武道館及び日本武道館で開催された「第一四一回全日本空手道選手権大会（公益財団法人全日本空手道連盟主催）」に出場。一回戦で取れたものの、秋田君は「出場できたことを誇りに思うし自信になった。この冬は走り込みなど身体づくりに取り組みたい」と話す。



「もっと強くなりたい」と稽古に励む秋田君

三重県選抜チームのメンバーに選ばれた秋田君は男子組手競技団体戦に出場し、男子組手競技個人戦の部においてもただ一人の三重県代表として出場した。さらなる飛躍を期待したい。

## 柔道部男子一部リーグ準優勝

### 東海学生柔道冬季優勝大会

十一月十七日（男子）、同二十三日（女子）、愛知県武道館にて行われた東海学生柔道冬季優勝大会において、男子は柔道部史上初となる一部リーグ準優勝を果たした。柔道部顧問の佐藤武尊先生は「この大会に向け、練習メニューに工夫を行い取り組んできた。選手自身のメンタル面の変化もあり、大きな成果を挙げた」と述べ、「彼ら自身、成長しているという確かな実感を得たと確信している。今後も、支えてくださる多くの人々に感謝し、来年の夏季大会に向け日々精進していきたい」と語った。今後の活躍に注目だ。



創部以来の快挙を成し遂げ、誇らしげな表情の選手たち

## 松商・フェヘイラさんが優勝

### 第14回高校生英語スピーチコンテスト



年々参加者のレベルがアップしている同コンテスト。認知度も上がり、参加校も増えている

本学文学部コミュニケーション学科では、十月二十七日に第十四回となる「高校生英語スピーチコンテスト」を開催した。同コンテストには県内十四校三十九名が参加。緊張感と熱気あふれる中、発表者はそれぞれ教科書や副読本などを題材にあらかじめ提出したテーマに沿ってスピーチを行った。審査員は本学コミュニケーション学科の教員を含む三名（うち二名は外国人教員）が務め、単語や文章の発音、スピーチのリズム、表現力などを基準に厳正に審査した。優勝したのは「What Teachers Make by Taylor Mail」と題するスピーチを行った松阪商業高校一年のフェヘイラさん。フェヘイラさんは喜び顔を輝かせながら、「ALTの先生と一緒に練習に励んだ。表情やイントネーションにはとくに気をつけた」と練習に明け暮れた日々を振り返った。

審査員は本学コミュニケーション学科の教員を含む三名（うち二名は外国人教員）が務め、単語や文章の発音、スピーチのリズム、表現力などを基準に厳正に審査した。優勝したのは「What Teachers Make by Taylor Mail」と題するスピーチを行った松阪商業高校一年のフェヘイラさん。フェヘイラさんは喜び顔を輝かせながら、「ALTの先生と一緒に練習に励んだ。表情やイントネーションにはとくに気をつけた」と練習に明け暮れた日々を振り返った。

- 入賞者  
第一位：アルベス ダニエル サントス フェヘイラさん（松阪商業高校一年）  
第二位：児玉 花梨さん（暁高校二年）  
第三位：奥野 綺良里さん（メリノール女子学院高校一年）

## いのちのキャンパス

平成26年3月1日(土)・2日(日) 10時~17時  
会場：三重大学 環境情報科学館

みなさんは普段から交通ルールを守っていますか？ 三重県内の5大学（北から四日市大学、鈴鹿医療科学大学、鈴鹿国際大学、三重大学、本学）の学生が中心となって運営している「いのちのキャンパス」実行委員会では、交通事故の悲惨な実態を伝え命の尊さを感じていただくために、「いのちのキャンパス」を開催します。会場となる三重大学環境情報科学館では遺族との対話のほか、被害者の生い立ち、事故の現状等を展示し、生命の大切さを発信していきたいと考えています。交通事故の加害者にも被害者にもならないために、まずは現実を知ること——ぜひご来場ください。  
実行委員 山崎理沙（現代日本社会学科4年）

イベント情報 (1~2月)

11日 皇學館大学共催講座 近鉄文化サロン阿倍野
『古事記』を読む(中巻)「応神天皇(二)」
白山芳太郎(文学部教授)

伊勢の遷宮を考える
-1日の祭り1年の祭り20年1度の祭り-
「外宮と内宮」白山芳太郎(文学部教授)

25日 皇學館大学共催講座 近鉄文化サロン阿倍野
神道と仏教-神社仏閣に見る神仏習合と神仏分離-
「熱田神宮における神仏習合と神仏分離」
河野訓(文学部教授)

1日 皇學館大学共催講座 近鉄文化サロン阿倍野
特別公開講座
明治維新の源流II-蒲生君平と天皇陵-
松本丘(文学部教授)

8日 皇學館大学ふるさと講座 名張市武道交流館いさぎ・多目的ホール
お蔭参りを歩こう-名張市一の鳥居から-
岡田登(文学部教授)

8日 皇學館大学共催講座 近鉄文化サロン阿倍野
『古事記』を読む(中巻)「応神天皇(三)」
白山芳太郎(文学部教授)

伊勢の遷宮を考える
-1日の祭り1年の祭り20年1度の祭り-
「伊勢の斎王」白山芳太郎(文学部教授)

15日 皇學館大学共催講座 近鉄文化サロン阿倍野
特別公開講座 江戸時代の大名
上野秀治(文学部教授)

22日 皇學館大学共催講座 近鉄文化サロン阿倍野
神道と仏教-神社仏閣に見る神仏習合と神仏分離-
「白山における神仏習合と神仏分離」
河野訓(文学部教授)

- 各講座の詳細につきましては、本学ホームページにてご確認ください
●共催講座(近鉄文化サロン阿倍野)のみ、有料です。お問い合わせは
近鉄文化サロン阿倍野(☎0120-106-718)へお問い合わせください。
●その他、お問い合わせは、皇學館大学企画部(0596-22-6496)へ
お問い合わせください。

編集後記
三重県の高校生の約8割が
皇學館大学に進学して
おられるという事実が
地域に与える影響は
計り知れない。皇學館
大学は、その影響を
受け、地域に貢献す
ることを目指して、
地域連携、地域活動
の活性化や発展を担
うべく、さまざまな
取り組みを行っています。
皇學館大学は、卒業
生が社会で活躍する
ことを目指して、卒
業生へのサポートを
行っています。

第3回ケント大学夏季短期留学報告記

学ぶものは、ことばだけではない

文学部コミュニケーション学科教授 児玉玲子



日本文化発信イベント「A Taste of Japan」のオープニングの様子(8月21日)



リーズ城前での集合写真(8月20日)

英国の名門・ケント大学は本学の教育協定締結大学であり、毎年多くの学生が夏季短期留学に参加する。八月三日から三十日まで実施された今年も十六名という例年になく多くの男子学生が参加し、女子六名とあわせて二十二名が渡英した。
猛暑の日本と違い、英国はとて快適な気候であった。カンタベリー大聖堂を見下ろす丘にある自然豊かなケント大学のキャンパスで、学生達は平日九時半から十六時まで、二時間弱のランチタイムをはさみ英語のレッスンを受けた。シャイな彼らは、最初は先生の質問にもなかなか答えられなかったが、徐々に慣れ、最終課題である英国文化についてのプレゼンテーションは、三週間の成果と成長がみられる見事なものであった。大学

現地では英語力向上の他に、国際感覚、また多様な英国文化等、いろいろなことを学びました。最終日には感極まって涙してしまふほど、充実した留学体験になりました。
とくにレッスンの集大成として、研修最終日に行われるプレゼンテーションに向けて、大忙しの毎日でした。授業の予習・復習、日本文化を発信するイベント「A Taste of Japan」の準備との並行作業……。プレゼンに与えられた時間

目当ての場所へと向かった。学生の中には出来るだけ多くの場所を訪れようと入念に計画を立てた者もいて、地下鉄の乗り方や道の尋ね方にも、すっかり慣れた様子であった。
短期留学で学ぶものは、ことばだけではない。青春時代に経験した人、歴史・文化の触れ合いは、何にも代えがたい貴重な宝になるであろう。

英語力向上には、アウトプットの強化が必要



教育学科一年 玉置はるな

は十分間と日本語ではあつという間ですが、英語で伝えるとなるとテーマを英国の歴史にしたこともあり、古い言葉を使することに大変苦労しました。では、どうしたのか? 言葉の置き換えです。英語から英語あるいは日本語、またその逆と、とにかくわかりやすく伝えるよう心がけました。プレゼンとうまくいったように思います。すべて英語で表現できたことが何よりの喜びとなりました。インプットは日本でそれまで学習してきた内容でも何とかなりでしたが、ケント大学での研修によって会話にしろ文章表現にしろ、それをいかに伝えるか、アウトプットの強化が今後必要不可欠に気がされました。

津田学術振興基金 国際交流特別企画

ケント大学の講師2名による教育・文学講演会を開催



さまざまな先生のイメージについて解説するショート氏は、高い学習効果を得るには自分にとって最適なメソッドを見つけることが大切だと解説した。氏は以前先生を美術館のガイドとして捉え、素晴らしい知識の側面をゲスト

教育の姿を比喻で考える
第一部は、ケント大学語学センターディレクターのジェーン・ショート氏による「英語学習のイメージ化」メソッドを用いて、言語学習の指導者と学習者の関係を「先生とは○○であり、生徒とは○○である」という「メタファー(比喩)」で考えることで、めざす教育の姿が明確になり、高い学習効果を得るには自分にとって最適なメソッドを見つけることが大切だと解説した。氏は以前先生を美術館のガイドとして捉え、素晴らしい知識の側面をゲスト

雅楽と英詩のコラボが実現
その後、ティータイムに続いて第二部の講演「詩と旅-東海道から土地の詩へ」が行われた。講師はケント大学教授であり、詩人でもあるナンシー・ガフィールド氏。講演の中で氏は、日本文化に見られる「人生と旅」とを重ね合わせるという概念が世界共通であることを紹介し、また日本絵画の特色である非対称性や空間の使い方が、自らの詩作に大きな影響を与えていると述べた。後半、邦楽部指導者の



日本に造詣の深いガフィールド氏
齋藤敏先生と齋藤愛美先生による尺八と琴の演奏に合わせて、氏が歌川重の版画をモチーフに創った詩集「東海道ロード」を朗読。雅な音楽と英詩のコラボにより、会場には不思議な時間が流れた。
今後本学はケント大学との相互の交流を深め、キャンパスの国際化を推進していく予定だ。

皇學館ミュージアム

神宮式年遷宮「遷御儀」御列和紙人形ジオラマ



(やまと鳳人形伊勢教室 阿部夫美子ほか制作)

巧緻を極めた再現人形
神宮式年遷宮のクライマックス「遷御儀」の再現和紙人形です。旧殿より新殿へ列次を整え「御」と申しあげる御神体をお移しする荘厳な祭典を遷御儀といいます。行列は「前陣」「綱垣」「後陣」に分けられます。前陣は宮掌、乗燭(松明)に続き、御桶や玉纏御太刀などの武器をはじめ、御籠、御蓋などの御装束神宝、神楽歌を奏でる楽長。
楽師などの構成です。天皇より差遣され行事を主宰される勅使と警蹕の掌典は行障の前に見られます。行障の後ろには御を捧持した大・少宮司、禰宜などの神職を囲む綱垣が続きます。その後ろには神宮祭主が続きます。後陣は前陣の反対の列次での構成です。
佐川記念神道博物館教授・学芸員 岡田芳幸